

7月7日「寂しい道から・・・」使徒言行録 8：26～38 ルカ福音書 15：1～10

ついに、恐れていたことが起こりました！教会への迫害です。それも、最初の教会は同じユダヤ人たちから迫害されたのです。先週は、祭司たちやサドカイ派の人々、大祭司の一族から、ペトロとヨハネが逮捕され、脅されたのに屈しなかった物語を聞きました。40年間、歩くことができなかった男性をペトロとヨハネが立ち上がらせたことに感激して5000人もの人達がイエス様を信じるようになります。けれども、祭司、サドカイ派、大祭司一族はそのことを快く思わなかったのです。彼らはペトロとヨハネに何度も脅しをかけますが、使徒たちは脅しに屈しませんでした。それどころか、さらにあちこちで癒しの奇跡を行い、イエス様について宣べ伝えるので、どんどんイエスを信じる人達は増えていきました。脅しても効果がないことが分かった大祭司たちははいよいよ、最後の手段、暴力に訴えることを決めました。そして、教会への迫害が始まります。使徒たちは次々に牢屋に入れられ、ついには初めての殉教者が出ました。中心人物であったステファノです。エルサレムの近郊にあった教会はやむなく、ユダヤ、サマリア地方へと散っていきました。こうして、イエス・キリストの福音は首都エルサレムからあらゆる場所へと伝えられていくことになるのです。

今日の物語の主人公はフィリポです。彼はステファノと同じく、使徒を支える役割を負っている一人でしたが、教会への迫害を逃れて、最初、サマリアへと向かいました。サマリア人とはバビロン捕囚の時に、各地へ捕囚されず、イスラエルに残された人たちのことです。彼らは、捕囚中、独自の聖書と信仰を生み出し、捕囚された人達とは異なる独自の歩みを始めました。そのため、捕囚後、帰還したイスラエルの人たちと、そこに残っていたサマリア人達との間には信仰の面でも、生活の面でも様々な溝が産まれます。もとは一つの民であったはずなのに少しの違いから仲たがいするようになるのです。そしてイスラエルの人達とはいつも緊張関係にありました。良いサマリア人の譬えはそのような緊張関係にあるサマリア人がユダヤ人を助ける話なのです。

さて、そのサマリアの地でフィリポは大成功を収めます。多くの人が信じるようになるのです。次に、聖霊の導きによりフィリポが遣わされたのはエルサレムからガザへと降る道でした。そこは荒れ果てて「寂しい道」だったようです。フィリポはサマリアに留まったのであれば、成功の余韻に浸りながら気楽に過ごせたはずですが、聖霊はフィリポに一箇所に安住するように教えませんでした。寂しい道へと送られます。そこに居たのは、遠くから来たエチオピアの宦官だったのです！

エチオピアの宦官、ここで言うエチオピアは今のエチオピアではなく、現在のスーダン（エジプトの南）のあたりに位置したヌビア人（黒人）の国です。その国はエジプト

で王を「ファラオ」と呼ぶように、「カンダケ」と呼ばれる女王が治めていたようです。彼はその女王に仕える宦官、つまりは去勢された官僚でした。この人は、どうやらエルサレム神殿で礼拝をして帰る途中だったようです。エルサレムの神殿は、外国人であっても入場して礼拝することができました。但し、去勢された者はユダヤ教に改宗することが出来なかったため、「神を畏れ敬う人」と呼ばれるユダヤ教の神を信じてはいるが、ユダヤ教徒ではない人だったようです。彼は馬車に乗ってイザヤ書を朗読していました。聖霊はフィリポにこの宦官の後を追いかけるように命じます。フィリポは走り寄って、イザヤ書の解釈を申し出ました。彼が読んでいたのはイザヤ書 53 章「苦難の僕」の歌でした。フィリポは宦官に話しました。この苦難の僕こそ、十字架につけられ、全ての苦しみを負って私たちのために死んだイエス・キリストのことだと。そして、復活して私たちの罪を贖われた救い主であることを。宦官の心には、イエス・キリストの愛が深く染み渡っていきました。そして、二人は水のあるところに来ました。おそらく、ガザ北方のあたりの大きな川だと言われています。宦官は願い出ます。「ここに水があります！ 洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか」フィリポは彼に、悔い改めのバプテスマを授けました。こうして、初めての異邦人のキリスト者が誕生したのです！

異邦人の宦官が救われた！ この出来事はイザヤ 56 章の預言の成就と言えるでしょう。少し長いですが引用します。イザヤ 56：1～5

「主はこう言われる。正義を守り、恵みの業を行え。わたしの救いが実現し／わたしの恵みの業が現れるのは間近い。いかに幸いなことか、このように行う人／それを固く守る人の子は。安息日を守り、それを汚すことのない人／悪事に手をつけないように自戒する人は。主のもとに集って来た異邦人は言うな／主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も、言うな／見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。なぜなら、主はこう言われる／宦官が、わたしの安息日を常に守り／わたしの望むことを選び／わたしの契約を固く守るなら。わたしは彼らのために、とこしえの名を与え／息子、娘を持つにまさる記念の名を／わたしの家、わたしの城壁に刻む。その名は決して消し去られることがない。」

先ほどもお話しましたが、イエス様の時代には、外国人であってもユダヤ教に改宗することが赦されていました。神殿には外国人も入ることができたのです。けれども、宦官は赦されていませんでした。律法で去勢された者は主の会衆に加わることはできないとされているからです。彼はどのような気持ちでエルサレム神殿で礼拝し、どのような気持ちで帰って行ったのでしょうか？ どれほど心の底から信じていても主の会衆に

は加われない、満たされない心の渇きがあったのかもしれませんが。彼の通った道は「寂しい道」でした。そこに心情が表れているようにも思えます。しかし、そこにフィリポは遣わされました。主の天使によって。神さまは寂しい道を行く者にこそ、救いの道を与えられるのです。

聖書を読んでいると、私たちが神さまと出会うのは「平坦で歩きやすい道」では無い様に思えます。族長アブラハムに神様が語りかけられたのは、彼の父親が突然亡くなったときでした。アブラハムは旅の途中で父テラを失います。これからは、たった一人で一族を背負っていかねばなりません。重い重圧がのしかかり、決断に迫られたその時、神さまからの声が聞こえてくるのです。夢見る人ヨセフが神さまに出会ったのは暗い牢屋の中です。長年献身的に仕えたポティファルの家で、その家の女主に陥れられ、無実の罪で牢屋に繋がれます。そんなヨセフに神さまは夢を通して語りかけられます。

先日、ある方からこれまでの信仰の歩み、生活の歩みをゆっくりとお聞きする機会が与えられました。本当に厳しい人生を歩んでこられたこととお聞きしました。けれども、改めて振り返ってみると、その時々で必ず神さまはその方を助けてくださっていました。信仰の支えの中で何とか乗り切ってきた様子が本当に良くわかり大変励まされました。自分自身のことを思い返しても、私たちが神さまと出会うのは平坦で歩きやすい道を歩んでいる時、ではないような気がする。荒れ果てた険しい道をゆく時、薄暗く心細い道を行く時、何より「寂しい道」の途中でこそ、私たちは神さまと出会うのです！足あとという詩を思い出します。

ある夜、私は夢を見た。私は、主とともに、なぎさを歩いていた。

暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。

どの光景にも、砂の上に二人のあしあとが残されていた。

一つは私のあしあと、もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、

私は砂の上のあしあとに目を留めた。

そこには一つのあしあとしかなかった。

私の人生でいちばんつらく、悲しいときだった。

このことがいつも私の心を乱していたので、私はその悩みについて主にお尋ねした。「主よ。私があなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において私とともに歩み、私と語り合ってくださいと約束されました。

それなのに、私の人生の一番辛いとき、一人のあしあとしかなかったのです。
一番あなたを必要としたときに、
あなたがなぜ私を捨てられたのか、私にはわかりません」
主はささやかれた。

「私の大切な子よ。私はあなたを愛している。
あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みのときに。
あしあとが一つだったとき、私はあなたを背負って歩いていた。」

今日はもう一箇所、見失った羊の譬えを聞いた。イエス様は神さまは羊飼いだと教えられた。それもとても愛情深い羊飼いです。その羊飼いは 100 匹のうちの 1 匹を見失ったならたとえ 99 匹を置いてでも見失った羊を探しに行かれます。「1 匹くらいええかとか、99 匹を守るほうが先決です」なんてことは言われません。たった 1 匹を探し出して大喜びされるのです。私たちはこの神さまに愛され、招かれている。私たちは自分自身を欠けが多く、罪深い者であることが分かっている。宦官のように、引き返すことの出来ないしるしを抱えている方もおられるかもしれません。それでも、神さまは私たちを諦めたり、見捨てたりすることは決してなさらないのです！

今日の物語はこんな風に終わります。

「彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。」彼の旅は、相変わらず寂しい道を行くものでしたが、もう、彼の心は寂しくありませんでした。神さまが共にいて下さることが分かったからです。神さまが、たとえ異邦人で宦官であっても、信じる者を見捨てておかれることはないことが分かったからです。彼の歩みは喜びへと変えられました。私たちも今日、改めてこの恵みを受け取りたいと思います。神さまは私たちを寂しい道に一人で残しておかれることは決してありません。たとえ死の陰の谷を行こうとも、必ず一緒に歩んでくださいます。喜びをもって、それぞれに備えられた道を歩み通したいと思います。